

はじける ところ

vol. 16
2007年3月号

〔創刊5周年記念号〕

- 人権の宝島：はじけるところのエッセイで授業
「ともだち100まんにん」箕面小学校……………1
「天国に行ったかな、ブチ」南小学校……………2
- はじける笑顔：みんな あそびにおいて……………3
箕面市子育て支援センター「おひさまルーム」
- はじけるところ創刊5周年に寄せて……………4
- エッセイ：ゴメンなさい……………5
- みのおようごサポートネット ぼっかぼかコンサート……………7



げんげの：「げんげ(紫雪草)」とは、れんげ草のことで、「げんげの」は、れんげ草が一面に生い茂る野原のことです。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を一面に咲かせます。また、れんげ草は、緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子ども一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました。

げ ん げ の の ぺ え じ

●写真募集！●子どもたちの笑顔、真剣な顔、輝く顔…などの写真をお送りください。

みのおから世界へ！ 人権文化の花束を！

みのおようごサポートネット主催

第3回
ぼっかぼかコンサート
2月25日(日) 14:00

箕面養護学校体育館



みのおようごサポートネットは、箕面養護学校創立20周年を記念して、子どもたちに継続した支援をしていくために設立された箕面市版NPOです。

「ぼっかぼかコンサート」は毎年地域のボランティアの協力を得て、箕面養護学校在校生や卒業生、箕面市内の小中学生、府下の養護学校にも呼びかけて、歌やダンスなど来場者も出演者と一体となって楽しんでもらえる催しを企画しています。今年も多くの方が参加して盛り上がりました。

〔出演〕

- ゴスペル「ぼっかぼかMASS CHOIR」
- ダンスユニット「KENKOU」
- 社会人バンド「ラグス」

はじける
笑顔

『はじけるところ』創刊5周年に寄せて

平成12年(2000年)8月に「人権教育基本方針」を策定いたしました。そして市民・教職員・関係団体等からなる人権教育推進会議を設置し、人権教育基本方針に基づく具体的施策が効果的にすすめられるように各委員から意見をいただいております。

広報誌「はじけるところ」は各学校等での人権教育の取り組みを広く市民に知っていただくために、平成14年(2002年)3月に創刊いたしました。今回の16号は6年目を迎え、これまでの5年間を記念した内容となるように編集いたしました。

創刊以来この5年間で多くの取り組みを紹介してきました。小中学校はもとより保育所・幼稚園・高等学校や今年度は就学前の関係機関の紹介もすることができました。一人ひとりの子どもたちが将来において、社会に主体的に参加できるようにするための力を学校教育や社会教育において一層充実していくために、今後も人権教育に関わる子どもや学校等の活動を『はじけるところ』を通じて、学校等の取り組みを支援する「応援団」として、市民委員を中心に取材をし、紹介していきたいと思っております。

箕面市教育委員会 教育長 仲野 公

人権教育推進会議情報誌『はじける ところ』

発行 箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会

人権教育課 TEL072-724-6921 FAX072-724-6010

e-mail: eduinken@maple.city.minoh.lg.jp

平成19年(2007年)3月

人権教育推進会議委員

守婦朋子、小関麻沙好、平沢清美、河野秀忠、中嶋嘉伸、安東由紀子、松川知恵、福島全子、上田晃江、上中弘基、藤原清子、細井末子、中田和成、坂田節夫、主原照昌、倉橋利治、川上加津子、仲野公、森田雅彦、奥山勉、上西彰、栗本忠夫、前田健、中野仁司、稲野公一、若狭周二、森井國央、笹川美千代、福永茂、中村信隆、千葉亜紀子、南悦司、向井裕彦、庄司豊、塩山俊明、中澤博、津田善寿、加藤真知子、黒田正記、吉田卓司、辻広志、小谷功、谷口あや子、森和則

「はじけるところ」は教職員・PTA運営委員に配布しています。公共施設においています。
公開ホームページ: <http://www2.city.minoh.osaka.jp/EDUJINKEN/JINKEN/jinken.html>

「はじけるころ」のエッセイで授業

「はじけるころ」では、かわのひでたださんのエッセイを創刊以来掲載してきました。5周年記念号では、箕面市内2小学校で、道徳の時間にこのエッセイを使つての授業を取材しました。

「天国に行ったかな、ブチ」 「はじけるころ」15号掲載

箕面市立南小学校 4年生

「ともだち100まんにん」 「はじけるころ」4号掲載

箕面小学校 2年生

この題名の「100まんにん」という言葉にまず子どもたちはどんなお話なのだろうと惹きつけられました。リョウくんやユキちゃんを軸にした子どもたちのつながりについて考えていければと授業に取り組みました。

人工呼吸器をしたがえ、ストレッツチャーにゆらめいているリョウくん。「こいびと」のユキちゃんも自分で歩いたり走ったりはできなかったけれど友だちがいっぱいいます。ユキちゃんが亡くなって一年たった集まりでは、みんなでゆきちゃんの大ききだった小学校まで思い出のページをめくりながら歩きます。一緒に話をしたり、みんなで交代しながらストレッツチャーを押ししたり。思い出が心いっぱい広がっているリョウくんや子どもたちには、すぐそばに「ユキちゃんに来てほしい」と感じられたのだと思います。

リョウくんはだれにでもその人のよさを見つけれられるし、花や動物や自然の中にもステキな所をみつけれられます。子どもたちにも、前向きに「いい所」をみつけれられるリョウくんのようになってくれればと思います。

指導計画（全5時間）

- 【第一次】全文を読み、感想を話し合う。（3時間）
- ①「思い出のページ」をめくる中でどうしてすぐそばにユキちゃんがきていると感じたのかを考える。
- ②リョウくんが、なぜユキちゃんの友だちをつくれるのかを考える。
- ③「みくんな友だちにしちゃう」リョウくんのいいところを知り、自分たちの友だちとのつながりを振り返る。
- 【第二次】友だちにしてもらってうれしかったこと、心があたたかくなったことを絵と文で表す。（2時間）

授業の中で

リョウくんには、世界のあちこちに友だちがいる。本文からわかるリョウくんの友だちを、黒板いっぱいに書いてみました（表紙写真）。日本だけでなく世界中。もちろん学校の友だち、近所の友だちも。

4年生では、なかなか、周りから理解されず、受け入れられにくい子どもについてどうすればまわりの子どもたちが理解してくれるのかを考えて、「天国に行ったかな、ブチ」という教材を使うことにしました。子どもたちは、人権教育副読本の教材「なあ、なあ、お母さん」で「どうしようもないこと」があること、ありのままのその人を受け入れることの大切さ、受け入れてもらえることの喜びを学んでいました。その学習に引き続き、子どもにとって身近な犬と飼い主とのふれあいを書いて「天国へ行ったかな、ブチ」の学習を通して、再度、「ありのまま」を受け入れ合える存在の大切さへの理解を深めていこうと考えました。そして、「ブチの死」から命の大切さについて考え合いました。学習を通して、友だち理解と自分の居場所について考え、自分を見つめる力をつけるきっかけともなりました。

指導計画（全5時間）

- ☆一読総合法で3部構成として読み進める。
- ・1時間目：ブチと車イスのぼくの生活を知る。
- ・2、3時間目：ブチの死を通して命の大切さに気づく。
- ・4時間目：ありのままを受け入れてくれる存在の大切さに気づく。
- ・5時間目：「リョウくんとともに」ブチの飼い主のリョウくんとお出会う。

授業の中で

・なんの取り柄もないブチに対して、「何もできないと見えていくけど、見えないところでよいことをしていると思う。」という意見が出ました。「クラスの中にもそんな人がいるよ。」と日頃目立たない子のよさをしっかりみていく子どもたちもいました。

・「○○さん」という人は、過去も現在も未来も一人しかいない、一人ひとりが二人とない大切な存在だということ。たったひとつの命だから、自分も人も大切にしようというメッセージを確認しながら授業を進めました。その中で子どもたちは、自分のこととして考えている子がほとんどで、自分の生活をふりかえることができました。

授業の今後について

小説のモデルとなったリョウくんは3月にお会いすることになりました。子どもたちが大きく成長できればと楽しみにしています。

間だけじゃなくて、自然も友だちにしてしまおうリョウくん。こんなリョウくんのいいところを考えてみました。「なかよくなるうとおしゃべりをいっぱいする。」「みんなを大事に思う。」「人、自然にやさしい。」「なかよくふれあう。」「みんなを大事にしたから、大事にしてもらえる。」「やさしい。」「こんなことが出ました。だから、「みんな友だちにできる。」「みんななかよしにできる。」という発表もありました。

友だちをついたり、友だちと仲良くすごしたりするには、お互いにリョウくんのような気持ちが持てたらいんだということがわかったようでした。そして、一人一人が自分の友だちのことを考えるきっかけにすることができました。

次に、自分の友だちのことを振り返ってみました。そして、友だちのかかわりの中で、心があたたかくなったことを絵に描き、文で表してみました。友だちにやさしいことをかけてもらったときのこと、友だちと楽しく遊んだことなど、思い思いに表現しました。

お話を読み終わって

「ともだち100まんにん」の感想

「だいたいようぶ？」

昼休み、うんていであそんでいたらとつぜん手がすべってうんていからおちちゃった。

そのとき、友だちが「だいたいようぶ？」と、言った。

そのしゅんかんいたみが「かわつ。」と、かるくなつた。

友だちが、「ほけん室、行い。」と言った。

そのとき、すくうれしかった。いそいで、「うん。」と言った。

子どもの感想から

・ぼく（わたし）にとつてのブチは、「お兄ちゃん（妹）です。けんかもするけど、やさしいところもあって、おにいちゃんのないことは、考えられない。

・私にとつてのブチは友だちの○○さんです。困ったときは助けてくれるし、相談にも乗ってくれる。これからはもっと大切にしたいです。（注：お互いにそう書いていました。）

・ブチはいつまでもリョウくんのこと、家族のことを天国で見守ってくれていると思います。

・わたしとスキップ（犬の名前）はリョウくんブチのようです。いつも、スキップといるといやなことも忘れて元気になれます。



人権感覚が一番

道徳や人権授業というと、堅く重いものになるのだからと少し心配しながら出向きました。でも、授業はその学年に合ったように展開され、暖かい雰囲気につつまれていました。多くの作品の中から選ばれた一編ずつですが、先生方それぞれの生き方・感性・問題意識などが授業での発問や展開にあらわれ、授業の内容を深めていくのだからと思えました。

箕面小学校での藤原校長先生の「人権感覚が一番大切」という一言は、私自身にも鋭く



せかいたくさん友だちがつくれることがすごいなあ。ほかの人やいきもの、しぜんのいいところを見つけているのがかこいね。友だちを100まんにつくれるなんてすごいな。おなじじょう気の人の気持ちもわかってるから友だちになれるところをヒントにしているのかな。

リョウくんは、みんなのことを友だちにしてしまつたら、いいなあ、思いました。わかつたことは、リョウくんは、歩けないけど、もとかをつかたり、手紙をつかたりして、いろいろなしせんや人たちをスキにして、友だちにしてしまつことがよくわかりました。わたしも、いろんな人やしせんを友だちにしてほしいと願っています。

「ともだち100まんにん」を終えて

二年生の三学期、子どもたちは、お互いのことがわかるようになり、一緒に遊ぶ機会も増え、友だちとの輪も広がってきました。そんな中で、この教材は、友だち関係を振り返るきっかけとなりました。また、もうすぐ三年生になり、クラス替えもあります。新しいクラスの中で、リョウくんのようにやさしい気持ちで友だちに接し、仲間の輪を広げてほしいと願っています。

ります。靴をかじったりブチといっしょで取り柄がないし、いたずらばかりするけど、スキップが大好きです。

・ぼくにとつてのブチは家族です。ぼくの家族は、とても仲がいいです。いっぱいしゃべります。ぼくのことを大切にしてくれま。

・ぼくの飼っている犬とぼくは、ブチとリョウくんよりもつと、心が通い合っています。負けないくらい、お互いに大切に思っています。きつとぞつです。ぜつたいぞつです。

・死ぬのはこわいし、大切にしてくれたい人がすく悲しむとわかりました。

響きました。これは、すべての教育活動においてのみならず、私たちが生きるあらゆる場面で大事にしなければならぬもの。ひとり人間として「これで良いのか」と自問しながら日常生活の中で育んでいかなければならないのだと教えられたように思いました。それは、大人になる過程で、また大人になつてからでも多くの事象に学ぶことや、人や自然と触れ合うことによつて様々なことを感じ考えることなど、また、好奇心を失わず主体的に物事にチャレンジするなど、柔軟でピュアな心失わず生活する中で育まれる感覚なのかとも思いました。

「人の生きざまに学ぶ」ことは、教えられることが多いなあと私自身も学ぶことができそうです。ぜひ「はじけるころ」をこれからも読んでください。そして、先生方から私たちにももっと多くのことを教えてください。ありがとうございました。

市民委員 小関 麻沙好



箕面市子育て支援センター「おひさまルーム」

みんなあそびにおいで！

はじける
笑顔

子育てをするお父さん、お母さん、子どもたちが、新しくお友だちをつくったり、いろいろな人と出会ったり、楽しく

すごせる場所として「おひさまルーム」は平成11年（1999年）に箕面市子育て支援センターとしてオープンしました。現在、市内中部（中央子育て支援センター・おひさまルーム かやの）と西部（西部子育て支援センター・おひさまルームみのお）2カ所にあります。利用対象年齢は、未就学の子どもとその保護者になっています。

室内にはたくさんのおもちゃがあります。手づくりの木のおもちゃ、テーブル、布の絵本、フェルト製・毛糸のままごと食料などはボランティアグループによる作品ということでした。

おひさまルームでは職員（保育士）と一緒にプログラムに参加し、保育を担当するボランティアや自分の特技生かす特技ボランティアがおひさまルームの活動を支える大きな力になっています。

遊びに来る親子もボランティアで参加された方も、ここではいろいろな人と出会ったり、つながりを感じたりできる場所、元気がわいてくるすてきな場所となっています。

中央子育て支援センター おひさまルームかやの

（萱野1-19-4 らいとびあ21 2階）TEL&FAX 072-723-5433

お休み 土・日（土曜日は午前中のみ、登録制にてお部屋を開放しています。）

お話会 第4木曜日 10:40~11:10

	月	火	水	木	金	土
10:00~12:00	オープンスペース	あそびのプログラム	イベントディ	オープンスペース	あそびのプログラム	登録制開放日
12:00~13:00	おべんとうひろば					
13:00~16:00	オープンスペース					

西部子育て支援センター おひさまルームみのお

（箕面6-3-1 箕面文化交流センター3階）

お休み 木・日

お話会 第3木曜日 13:30~14:10

	月	火	水	木	金	土
10:00~12:00	オープンスペース	あそびのプログラム	イベントディ		あそびのプログラム	オープンスペース
12:00~13:00	おべんとうひろば					
13:00~16:00	オープンスペース					

子育て支援センター

「おひさまルーム」を見学して

守婦 朋子

「あそびのプログラム」（7回で1クール）を見学し、子どもたち、保護者、ボランティアといっしょに歌や体操を楽しみました。ゆったりとした雰囲気、子ども一人ひとりを包み込んでいるように見えました。今回のプログラムは、母親のおひとりが、空手を取り入れた体操をしてくださいました。その他にも保護者が互いに悩みなどを話しあえる時間や、曜日ごとに異なる活動があり、プログラム内容は充実していると思います。申し込みがなくても参加できるものもありますが、スペースの広さ、スタッフの人数などから人数制限をせざるをえないものもあると聞きました。内容が充実しているだけに、その点が非常に残念でした。保育隊、特技隊というボランティアが増えれば、西部子育て支援センターともども、活動がさらに充実するのではないかと思います。

はじけるころろ創刊5周年に寄せて

はじけるころろが創刊されて以来、5年間続けて発行していくことができました。そこで、今回は創刊から関わっていただいていた市民委員の方に、創刊号を発売した頃の思いやエピソードと現在人権に関わってどのような活動をされているかをうかがいました。

●服部ひとみさん

応募のきっかけ

部落、障害者、外国人といった固定的なマイノリティーのイメージのから抜け出して、「人権」という大きな括りのなかで人の権利を捉えることで、すべての人に当事者意識が生まれるのでは？ 外から眺めるのではなく、みなが入って人権の当事者となる、というイメージに触発されて、公募に応募しました。策定委員会の思い出

さまざまな場から、人権について熱い思いを抱く人ばかりが集まっておられ、私は場違いなところに来てしまったとはじめから後悔しましたが、この機会に勉強させていただこうと思い直しました。

はじめにKJ法で「人権って何?」「基本的方針のイメージは?」とランダムに考えを出し合いました。自由で柔軟な発想から出発する態度が、基本方針のきっかけにふさわしかったなと、なつかしく思い出しています。

途中、河野さんがユニークな方針案を出されたりしましたが、最終的には、鍋島先生がそれぞれのメンバーの思いを丁寧に抽出してくださり、さらに広い視野に立った普遍性と独自性のある最終稿が完成しました。

●精神保健ボランティアと人形劇

2001年の推進会議発足と同時期にこのボランティアを始めました。今考えてみると、基本方針に背中を押されたのかもしれない。

2003年におこった精神障害者の施設移転にか

らむ出来事がきっかけで、障害者の方たちが地域の人たちと接することのできる機会を増やしたい、別の価値観を発信できるような文化活動をやってみたいと思うようになり、無謀にも人形劇を始めました。障害者の方たちとボランティアで話し合いながら、おはなしづくりから始めます。劇の内容そのものには直接的な啓発メッセージは出しません。現代社会で忘れられている価値観をちょっとシニールなかたちで表現するのが目標です。

一人て病院などに行くのが大変な外国人に同行して、手続きを手伝ったり、通訳をしたりする活動を箕面市国際交流協会等との協働で行っています。この活動を通して私たちの地域社会が本当に多様になってきているのを感じます。留学や研究で大学などに来ている人、国際結婚や仕事のために日本で生活している人など、言葉や文化が異なる人々が同じ地域の住民として暮らしています。最近では特に妊娠・出産に伴う依頼が多く、日本で子どもを産み、育てる人が増えていることを実感します。先日もらいおとびあ21で地域に住んでいる中国の方たちが企画した「春節を祝う会」というのがありました。参加者の多さと子どもたちの見事なバイリンガルにびっくりしました。

●埋橋淑子さん

みなさん、お久しぶりです。「はじけるころろ」、なつかしいです。委員をやめてからなかなかこの冊子も目にする機会がなかったのですが、久しぶりに電話をもらいました。学校の人権教育に対する「市民の応援団」というような位置付けで市民委員がつくられたと記憶していますが、バトンがつつぎに引き継がれて、学校と市民、市民と市民、学校と学校がつながっていく媒体として「はじけるころろ」が継続され、育っていることをうれしく思います。

さて、あの頃から5年の月日が経ちましたが、私の5年も結構あわただしいものでした。ちょうど5年前の今頃、仲間と一緒に「みのお外国人医療サポートネット」というボランティア団体をつくりまし

「みのお外国人医療サポートネット」の活動は、1999年に箕面在住のインドネシア人男性が、言葉ができないことを理由に十分な治療も受けられずに亡くなった、という出来事をきっかけに始まりましたが、ボランティアがどこまでできるのか、という問題があります。今後更に増加するであろう外国人市民も地域のなかで安心して生活ができるようになるためには、「日本語を話す日本人」を前提としてきた様々な社会のシステムが変わっていかなくてはならないと思います。「箕面の子どもたちと市民が、世界の人々と手をたずさえて人権文化の花を咲かせることができるよう…」とうとう「人権教育基本方針」の理念を今の活動の中でも実現していたら、と考えています。

「クメンなわつ・・・」



かわのひでただ

わたしも、お母さんも、とってもかわがりななよ。春になって、あたたかくなるよ。ごろんな虫が出てくるでしょ。あれがダメななよ。とくに「クキちゃん」がダメ。あの黒くてデッカイやつ。

お母さんが、「クキちゃんが出るよ」「キヤ〜ジ。」

とかなんとかさげとで、家のなかをこげまわってるよ。もち、わたしもつこまになつて、こげてる、ウフッ。お父さんがいるときは、お父さんが新聞紙をまるめめて、バシッってやつちゃうんだ。け、つこまになつから、「クメンなわつ」か。「クメン」って飛んでくるんだよ。明るくつゆめがけ、バチョロチョロ、バァ〜っ。

このまえね、あんまりお母さんがこわがるもんだから、わたしがおもひきって、目をこめてお父さんのように、新聞紙でバシッってやつちゃうんだ。こわかったよ。そしたらお母さんが、ありがともつわす。

「とんな虫にも、大切なものがあるんだから、「クメン」ななつこつ、いわなきゃね。」

つこまになつたよ。あんなこわがるクセにな。しかたがないから、ちやんたの「クキちゃん」

わたしもついていた新聞紙をとりあげて、ちやんたの「クキちゃん」をバシッって、

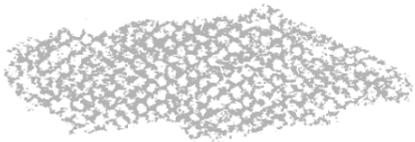
「クメンね。」

つこまになつたの。お兄ちゃんは、つこまは、じゃへらないんだよ。なにがおもしろかったんだろつね。

それからだよ。わたしとお母さんが、「クキちゃんをみつけれ、

「キヤ〜ジ。」

つこまになつたよ。ドタドタにげると、「お兄ちゃんが、新聞紙でバシッ、「クメンね。バシッ、「クメンねって、「クキちゃんをおごかけるの。」



お兄ちゃんの学校の先生が、かていほうもん（家庭訪問）で、わたしんちにきたの。先生がお母さんに、つこまになつたのよ。

「つこまになつたよ。りりりつたくんが教室で、なんとも、なんとも新聞紙でゆかたたいては、「クメンね」「クメンねつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。つこまになつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。」

「クメンねつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。つこまになつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。」

「クメンねつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。つこまになつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。」

「クメンねつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。つこまになつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。」

「クメンねつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。つこまになつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。」

「クメンねつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。つこまになつたよ。ア、ア、ア、なんのじやないのよ。」



みんなではなじあうポイント

- あなたは、「いのち」は、軽いと思いますか。重いと思いますか。どちらでしょう。どうしてそう思うのですか。
- りょうたくんは、どのような子どもなんでしょうか。
- あなたは、お父さんやお母さんが、あなたにたいして、どのようなことを考えておられるのか、話し合ったことがありますか。いちど、「お父さん、お母さんに聞いてみましょう。」
- あなたや、おともだちは、「いのち」を大切にしていますか。それは、どのようなことですか。
- ひとのいのちと、虫のいのちは、どちらが大切なんでしょうか。先生といっしょに考えてみましょう。

